

W-2-3

長崎県藪路木島方言の「動詞中止形＋助詞」による脱従属化の記述的研究

原田走一郎（長崎大学多文化社会学部 haradaso@nagasaki-u.ac.jp）

1. はじめに

本発表は長崎県^{やぶろきしま}藪路木島方言における「動詞中止形＋助詞」による脱従属化 (Evans and Watanabe 2016:2) 構造の記述を目的とする。本発表が対象とする現象は次に示すようなものである。

(1) (この仕事は覚えたか、と聞かれて) サセラレチ {ゾ／コソ}。「させられてこそ。」
この表現は、字義通りには「させられてこそ。」という意味であるが、上のような文脈では「させられてこそ、覚える。」という解釈、また、その裏の「させられていないから、覚えていない。」という解釈が生じる。したがって、次のような発話が可能である。

(2) (今日は魚を釣ったのかと聞かれて)

ツルモツランモ、オマエ、エサンアジバツリキラン、エサンアジバツ^{ツチゾ}。

「釣るも釣らないも、お前、餌のアジが釣れない。餌のアジを釣ってこそ。」

この発話の場合、「魚は釣っていない。」という解釈になる。本発表ではこの解釈を「反実仮想」解釈と称する。本発表ではこの現象について、次の4点を述べる。

- (3) a. 主節が省略されることで生じた脱従属化構造である。
b. 「ゾ」または「コソ」という助詞の共起が必須である。
c. 特定のイントネーションが必須である。
d. 聞き手に反発する際にしか用いられず、反実仮想解釈に偏る。

なお、方言における「こそ」を用いた「反語」表現については大西 (2003) や小林 (2006) に記述があるが、「ぞ」を用いた類例の研究については管見の限りないようである。

本発表の構成は次のとおりである。2 節で当該の構造の形態統語的な特徴を見、主節が省略されたものと見られることを示す。3 節では音調上の特徴を述べる。4 節では、当該の構造の用法上の特徴を述べる。5 節ではまとめを行い、今後の課題についても述べる。

ここで、本発表の研究対象である藪路木島方言について簡単に触れておく。藪路木島は五島列島の北部に位置する島である。1972 年に島民が集団離島したため現在は無人である。坂口 (1998) によると五島列島全体が南部離島方言に属するため、藪路木島方言も長崎南部離島方言の 1 つである。長崎県内の方言はすべて肥筑方言に属するため、藪路木島方言も肥筑方言の 1 つである。藪路木島方言は肥筑方言の特徴をよく有している。たとえば、対格助詞は「バ」であるし、形容詞はいわゆるカ語尾を持つ。

本研究は 1944 年藪路木島生まれ、1972 年まで同島在住、以後長崎市在住の男性から得られた資料に基づく。調査は面接調査を行った。録音には ZOOM H4nPro と SHURE WH20 を用いた。音声分析には Praat (ver. 6.3.06) を用いた。

2. 形態統語上の特徴について

本節では当該の構造の形態統語的な特徴を見る。2.1.では動詞の形態が本来従属節で用いられるものであることを示す。2.2.では当該の構造に必須の助詞のうちの 1 つである「ゾ」についてその特徴を述べる。2.3.において当該の構造と類似する表現を並べて見ることでその出自について考察する。

2.1. 動詞中止形について

まず、動詞の形態について述べる。簡単に述べると、当該の構造の動詞の形態は標準日本語のいわゆるテ形に当たる。したがって、従属節を形成したり、複雑述語を形成したりする。

- (4) オカサンニホコラレチ、ナッカブッタコノオル。

「お母さんに怒られて、泣いた子供がいる。」

- (5) マイトキセレバ、アキラムモドッチクーダヨ。

「もうちょっとしたら、アキラも戻ってくるだろう。」

つまり、この動詞の形態が主節にたつということは通常ない。そのためこの形態を中止形と称する。

この動詞中止形にとりたて助詞「ゾ」が後続したものが本発表で取り上げる構造である。この「動詞中止形+ゾ」という連続そのものは従属節にも生起する。

- (6) ヒッコケチゾ、ネータ。「(叩かれて泣いたのではなく) 転んで泣いた。」

- (7) フイクーチゾ、ヨカ。「冬食べてこそ、いい。」

このように、「動詞中止形 (+ゾ)」は時間的先後関係や理由などを表すものと思われる。

2.2. 共起する助詞について

前節で述べたように動詞中止形は従属節に生起するのがふつうであるが、脱従属化したものもある。しかし、動詞中止形だけでは脱従属化構造としては用いられない。

- (8) *サセラレチ。

脱従属化構造としての使用には、とりたて助詞「ゾ」もしくは「コソ」の追加が必要である¹。「コソ」については調査が進んでいないため、本発表ではこれ以降「ゾ」のみを取り上げる。本節では、この助詞「ゾ」について述べる。このとりたて助詞「ゾ」はほぼ古典語の係助詞「ぞ」と同じ統語的位置に生起しうる。藪路木島方言には連体形と終止形の区別がないため、係り結びは生じない。古典語の「ぞ」の統語的位置について小田(2015:435)では「「ぞ」「なむ」「こそ」は、述語に係る成分であれば、原則として、どのような成分にも承接することができる」と述べられており、次のような例が挙げられている。次の①から⑥は古典語では「ぞ」が生起可能な位置である。

- (9) a. この歌を①よろしと②聞きて③、翁④、月頃の苦しき心やりに⑤詠めり。

- b. この歌をよろしと聞きて、翁、月頃の苦しき心やりに詠み⑥する。

これらの位置のうち、藪路木島方言の「ゾ」が生起可能であるのは③④である²。このような統語的位置に生じる藪路木島方言の「ゾ」であるが、機能としては排他を表すものと思われる。

- (10) a. ドロガミゾオトロシカ。「雷だけが怖い。」

- b. ドロガミオトロシカ。「雷が怖い。」

- (11) ケンカジェナカツヨ。ヒッコケチゾネータ。「ケンカじゃないんだよ。転んで泣いた。」

¹ 今のところ「ゾ」と「コソ」しか当該の構造に用いられるとりたて助詞は見つかっていない。

² ただし、①の位置については、助詞「を」に相当する助詞「バ」を落として「ゾ」を後続させることは可能である。また、古典語の「ぞ」はいわゆる状況語に後続しうるが、藪路木島方言の「ゾ」が後続しうる状況語はかなり限定的である。現在のところ、「コンテガメ、キノゾトデタッタ(この手紙は昨日届いた)」のような時の副詞に後続する例しか確認されていない。さらに、従属節中の「ゾ」の生起のしかたには主節とは異なる制限がありそうである。これらの点は今後の調査を必要とする。

2.3. 「動詞中止形+ゾ」を用いた反実仮想表現群と脱従属化

ここでは、これまでに述べてきた「動詞中止形+助詞(ゾ)」という形式を用いた反実仮想を表す表現をいくつか見る。そして、主節が省略されることによって反実仮想解釈を持つ脱従属化構造が成り立ったものと考えられることを述べる。反実仮想を表す表現は主に次の3つがある。

- (12) 「あの子は元気だったか？」と聞かれ、「会っていないから分からない」と答える際に)
- a. オーチゾワカル。「会ってこそ分かる」
 - b. オーチゾ。
 - c. オーチゾアル。

(12c) については、本発表の本筋から離れるが後で述べる。本発表の主な対象は(12b)である。本発表では、(12a)の主節が省略されて(12b)が可能になったものとする。これは、次の例のように質問に直接答える際には当該の構造は不自然であるとされるためである。

- (13) (あの子に会ったのか?と聞かれて)??オーチゾ。「会ってこそ。」

このような返答は相当不自然で、もしこのような返答をした場合極めてぶっきらぼうに聞こえるとのことである。このことは「オーチゾ」そのものが「会っていない」ことを意味するわけではないものと解釈できる。つまり、語用論的解釈が必要とされ、脱語用論化(depragmaticization)が完了しているわけではないのであろう。このことから、(12b)は(12a)の主節が省略されたものであると考える。

語用論的解釈の過程としては、次のようなものであろうと思われる。上に示した通り、「ゾ」は排他を表すため、「～チゾ、・・・。」という複文は従属節の内容が成立した場合にのみ、主節が成立するということを表す。また、「ゾ」が排他を表すということは、排除された他の候補を暗示しているということであり、他の候補の可能性、つまり、主節が成立しない可能性が暗示される。このようにして反実仮想解釈がなされるものと思われる。なお、このように考えた場合、他の条件形式でも同様の解釈が生じるように思われるが、それは今のところ確認されていない。たとえば、次のような例は不可能である。

- (14) (あの酒はおいしかったか?と聞かれて) *ノーダラゾ。「飲んでこそ(分かる)。」

ここで、(12c)の「動詞中止形+ゾ+アル。」で文を終える反実仮想表現について述べる。この表現は「動詞中止形+ゾ」で形成される名詞節に「アル」というコピュラが伴ったものと本発表ではとらえる。「～チゾアル。」の「～チゾ」を名詞節ととらえる根拠は、「～チゾンハナシ「話」」という表現の存在である。この「ン」は属格助詞であるので、前接部は名詞相当と考えざるを得ない。これと同じものが(12c)の「～チゾアル。」の「～チゾ」部分と考えると「アル」はそれを述語化する部分であるため、コピュラととらえるのが自然である。藪路木島方言にはコピュラとしての「ある」と思われるものが他にもある。それは「～ゴツアル(～のようだ)」という表現である。この場合も、通常のコピュラである「ジャ」は用いられず、「アル」が用いられる。このように考えると、「オーチゾアル。」という表現は標準語にそのまま訳すと「会ってこそだ。」となる。なお、大西(2003)には「こそ」と呼応する「ある」について別の解釈が示されている。次節以降は「～チゾ。」で終える脱従属化構造に限定して記述を進める。

3. イントネーションについて

本節では「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造にかかるイントネーションについて述べる。当該の構造には特定のイントネーションがかかる。そしてそのイントネーションはこの脱従属化構造に特有のものではなく、聞き手に認識の変更を求めるような発話の場合にも用いられるものであることを示す。

まず、特定のイントネーションの必須性について述べる。「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造において

は、「ゾ」の母音が延長され、その間にピッチが急上昇するイントネーションが必ず伴う。このイントネーションを「急上昇イントネーション」と本発表では呼ぶ。急上昇イントネーションが伴わない場合、当該の脱従属化構造は用いることができない。急上昇イントネーションの例を次の図1、2に示す。

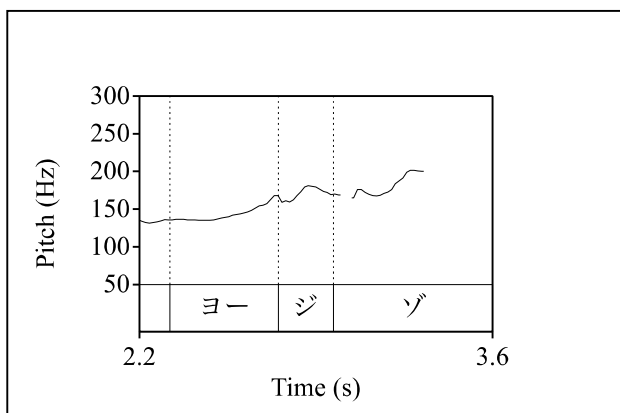


図1 ヨージゾ「読んでこそ」

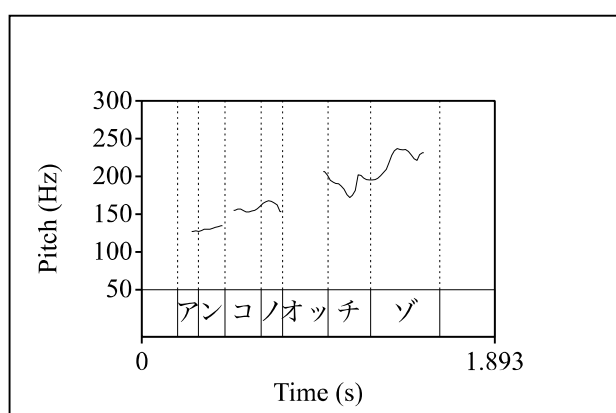


図2 アンコノオッチゾ「あの子がいてこそ」

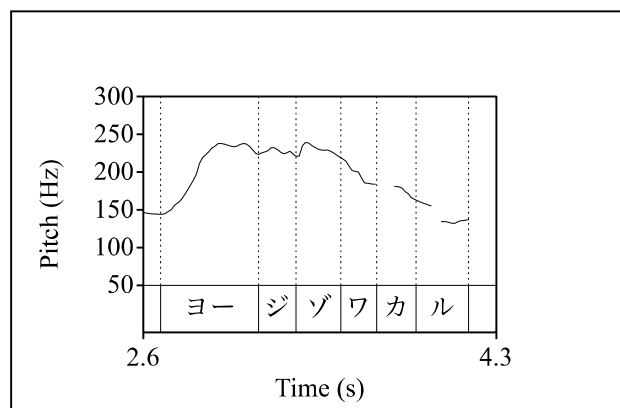


図3 ヨージゾワカル「読んでこそ分かる」

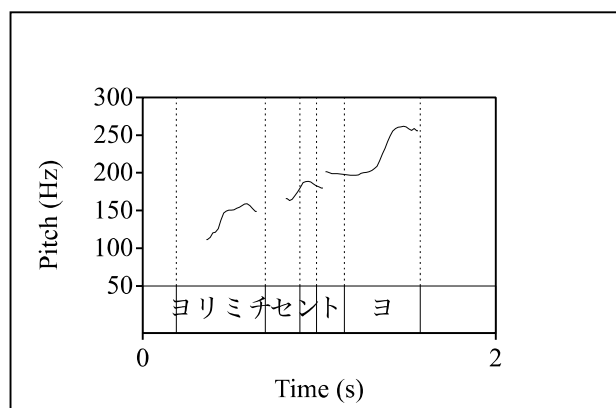


図4 ヨリミチセントヨ「寄り道しないんだよ」

この急上昇イントネーションは従属節の場合には生じない。上の図3の例は「動詞中止形+ゾ」の連続はあるものの、従属節中のものである。この場合、「ゾ」で高くなるものの、すぐに下降している。このことから急上昇イントネーションが「動詞中止形+ゾ」の場合に必ず生じるわけではないことがわかる。

一方、この急上昇イントネーションは当該の脱従属化構造に特有のものでもない。上の図4の例においては末尾の母音が延長され、かつ、その間でピッチが上昇している。そのため、このイントネーションは「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造にかかるものと同じ急上昇イントネーションであるとみなせる。またこの例（および下の図5の例）から、このイントネーションは主節に用いられること、また、聞き手の認識の変更を求めるような文脈において用いられるようであることが分かる。

一方、次のページの図5、6の例はそれぞれ文末に「ゾ」を持つが、イントネーションが異なる。つまり、終助詞の「ゾ」と判断されるものは図5のように急上昇イントネーションをとることも可能であるし、図6のように下降のイントネーションをとることも可能であるということである。これに対し、「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造には必ず急上昇イントネーションがかかる。主節のイントネーションのなかでも特定のイントネーションが当該の構造にかかる必要があるということを示した。

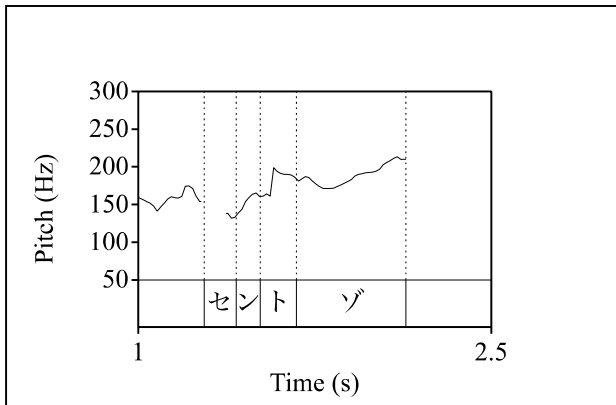


図 5 セントゾ「しないんだよ」

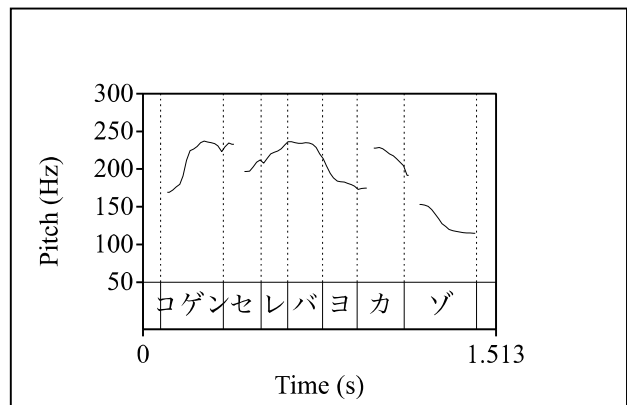


図 6 コゲンセレバヨカゾ「こうすればいいよ」

以上、「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造は急上昇イントネーションを伴うこと、その急上昇イントネーションは本来主節にかかるイントネーションであることを示してきた。したがって、当該の構造は形態統語上は従属節の特徴を、音調上は主節の特徴を持つ構造であると言える。

4. 「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造の用法上の特徴

ここでは、「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造の①聞き手に反発する際に用いられる、②反実仮想解釈に偏る、という2つの用法上の特徴を述べる。これらは急上昇イントネーションがかかった場合に限る。

まず、聞き手に対する反発という点について述べる。次の例は使用可能なものである。

(15) (実現不可能なことを他人から頼まれ、それに対して「無理だ」と答えるとき)

a. ソゲンニイメンゴタルハナシ。マホンツカエチゾ。

「そんな夢のような話。魔法が使えてこそ。」

b. ショクニンノヒヤクニンオッチゾ。「職人が100人いてこそ。」

上の例はどちらも使用可能な例であるが、状況が異なると同じ文でも使用不可になる。たとえば、(15ab)は、同じような状況に際して「そんな仕事できない。」と言っている仲間に対して「そうそう、無理無理。」と同調する際には用いられない。このことから、当該の構造は聞き手に反発する場合にのみ使用可能であるものと思われる。

続いて、反実仮想解釈に偏ることを述べる。「サセラレチゾ。」という例は、文字通りには「させられてこそ。」という意味であるため、「させられたからこそ、覚えた。」という解釈ができてよさそうである。しかし、次の(16)のような場合、その解釈はできない。この例は「させられていないから、覚えていない。」という解釈になる。また、(17)も同様の例である。

(16) (この仕事は覚えたかと聞かれて、「させられたからこそ覚えた」という返答をする際に)

#サセラレチゾ。「させられてこそ。」

(17) (褒められたからこそ、がんばったんだという意味で) #ホメラレチゾ。「褒められてこそ。」

このように、「動詞中止形+ゾ」の脱従属化構造は反実仮想解釈に偏ると言える。ただ、次の例は使用可能な例であるが、この場合、「あの子が来る」ことは予想されているため、反実仮想とまでは言えず、「非現実」といった特徴づけのほうが正確かもしれない。この点はより詳細な調査が必要である。

- (18) (当該の人物が来ることは予想されていて、あの子が来たら(飲む)という意味で)
アンコノキチゾ。「あの子が来てこそ。」

先にも述べたが、これらの特徴はあくまでも上述した急上昇イントネーションがかかった場合である。

5. まとめと今後の課題

以上、本発表では藪路木島方言の「動詞中止形+助詞(ゾ)」の脱従属化構造の記述を行った。スペイン語の *si* (英語で *if* に訳される) を用いる脱従属化構造は、「要求や勧誘といった言語行為におけるポライトネスや緩和の機能として用いられるわけではないという点において、条件節の脱従属化構造としては特異」(Schwenter 2016: 90 原田訳) とされるが、藪路木島方言の当該の脱従属化構造についても同様のことが言える。なお、この特徴が脱従属化構造そのものに起因するのか、イントネーションに起因するのか、という点については今後要検討である。すくなくとも、方言における従属節関連現象の多様性の一端を示すことができたように思う。

また、これまで方言のイントネーションは多様性が認識されながらも記述が多いとは言えず、さらに、脱従属化の研究においても「the neglect of prosody (Evans and Watanabe 2016: 25)」が指摘されている。本研究では直観的な報告にとどまるものの、イントネーションの重要性について自戒を込めて述べた。

残された課題について述べる。他の多くの方言も同様であるが、藪路木島方言全体の記述がなされる必要がある。本発表のトピックに密接にかかわる課題としては、脱従属化構造にかかる他のイントネーションの記述が挙げられる。実は、「動詞中止形+ゾ」で終える文は今回扱った反実仮想以外の解釈を受けることがある。次のような例である。

- (19) ヒッコケチゾ。「(ケンカしたのではなく) 転んだからこそ(泣いた)。」

ただし、この場合、かかるイントネーションが異なるようにも思われる。上の非反実仮想の例の場合、右の図7のように「ゾ」全体が高く実現した。このことは、形態統語的には同一の脱従属化構造が複数のイントネーションをとるということを意味する可能性がある。今後この可能性も含めて、イントネーションとの関係についてはより詳細な記述が必要になると思われる。

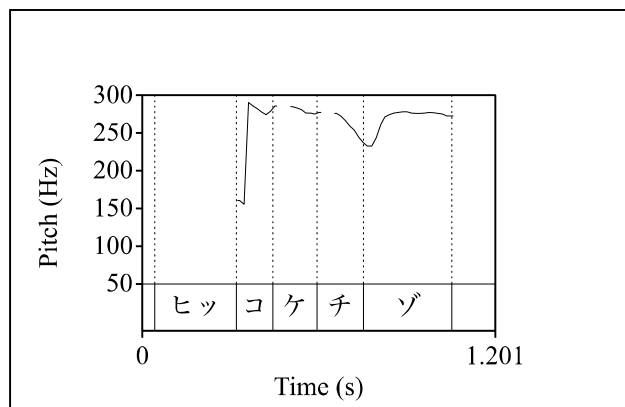


図7 ヒッコケチゾ「転んだからこそ」

参考文献 大西拓一郎 (2003) 「方言における「コソ～已然形」係り結び」『国語学』54(4), 31-43. / 小田勝 (2015) 『古典文法総覧』東京：和泉書院. / 小林隆 (2006) 『方言が明かす日本語の歴史』東京：岩波書店. / 坂口至 (1998) 「総論」平山輝男 (編) 『長崎県のことば』1-27, 東京：明治書院. / Evans, Nicholas and Honoré Watanabe. 2016. The dynamics of insubordination: An overview. In Evans and Watanabe (eds.) *Insubordination.*, 1-37. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. / Schwenter, Scott A. 2016. Independent *si*-clauses in Spanish. Functions and consequences for insubordination. In Evans and Watanabe (eds.) *Insubordination.*, 89-111. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.